



GALLERY TERRA-S

KYOTO SEIKA UNIVERSITY
CENTER FOR EXHIBITION PLANNING
ACTIVITY REPORT 2022

京都精華大学
展示コミュニケーションセンター
2022年度活動報告書

**KYOTO SEIKA UNIVERSITY
CENTER FOR EXHIBITION PLANNING
ACTIVITY REPORT 2022**

京都精華大学
展示コミュニケーションセンター
2022年度活動報告書

目次 | CONTENTS

05 2022年度活動サマリー

教育普及事業

08 アートをおく2

12 アートをやる2

展覧会

16 ドラフト・ライブラリー in 明窓館 書を拾い、喋るでしかッ!

18 小田隆展「人体×動物」／小田研究室大学院合同展示「けものぼこ」

20 X 人 X

22 京都精華大学ギャラリーリニューアル記念展
「越境— 収蔵作品とゲストアーティストがひらく視座」

26 死ぬまで絵を描き続けるには2

28 光をくぐり抜けた人

30 合同陶芸展

32 参与観察2

34 プレインマンガ 言葉のない物語

36 生命の花— Flower of Life

38 マンガクラス創設50周年記念展「マンガ— 野良の芸術」

40 京都精華大学 嵯峨御流華道同好会 第25回華展「うつろい」

42 Seika Artist File #1「ゆらめくいきものたち」

46 光の向こう側で

48 ようこそドゴン

50 プロジェクト企画演習2022成果展

52 木野祭2022作品展示会サイコウ!展

54 京都精華大学展2023 卒業・修了発表展

56 ○○が連続された時

58 兆し

60 高校生のための第4回創作作品コンペティション
「SEIKA AWARD 2023」入選作品展

基本情報

62 来場者数・参加者数

63 施設案内・ギャラリー図面

2022年度 展示コミュニケーションセンター構成員

豊永政史 | 展示コミュニケーションセンター長 / デザイン学部教員

緒方しらべ | 国際文化学部教員

宮永亮 | 芸術学部教員

伊藤まゆみ | 展示コミュニケーションセンター特任教員

飯澤ちあき | 学長室グループ員

小坂俊夫 | 総務グループ員

齋藤雅宏 | 展示コミュニケーションセンター運営スタッフ ※陪席



2022年度活動サマリー

展示コミュニケーションセンターの3つミッションに基づいて、2022年度に実施した各事業を紹介する。

MISSION 1

学生を主体とした展示活動支援のあり方を検討・提案

①新規展示スペースの選定、②新規展示企画の調査、立案

昨年度に引き続き、センター長の豊永を中心に調査を行った。次年度に報告書をまとめると共に、いくつかのプランを立案する予定である。

③教育普及事業

センター員の宮永と豊永がインストールワークショップ「アートをおく2」、緒方と飯澤が表現活動と生きていくことについての座談会+ライブ演奏「アートをやる2」の企画を担当した。

「アートをおく2」は昨年度に実施した「アートをおく」に引きつづき、本学非常勤講師の武田俊彦をゲストに迎え、2日間にわたり、参加者と共に身近な素材を「作品のように」インストールするワークショップを開催。今回は明窓館内の各所、1Fホワイエ、アクティビティcommons、2Fインフォメーションcommons、ホワイエ、4Fテラスで展示を行い、2日目には、本学芸術学部教員の中村裕太と、ギャラリーTerra-S展示コーディネーターの齋藤雅宏をゲストに、展示についてのレビューを行った。インストールの技術やノウハウを学ぶとともに美術作品に関する批評的な視点についても養う機会となった。

「アートをやる2」は、京都市左京区を中心に、芸術/表現活動に携わりながら、それとは別の活動で生計をたてている画家、写真家、ミュージシャンほか5名のゲストを迎え、座談会を開催した。座談会は、昨年度の「アートをやる」にて、学生の個別相談とレクチャーを依頼したインディペンデントキュレーターの長谷川新氏をコメンテーターに迎え、事前に参加者から集めた「アートをやる」ことへの相談に答える形式で進めた。ゲストの学生目線にたった回答は、多くの参加学生にとってこれからの生き方についてヒントを得る場となった。

MISSION 2

企業等との連携企画事業の促進についての検討・提案

①前・後期企画展の企画・運営

企画展は、センター員の伊藤が担当し、運営スタッフの齋藤やセンター員の協力を得て実施した。前期企画展「ギャラリーリニューアル記念展『越境—収蔵作品とゲストアーティストがひらく視座』」は本学芸術学部教員・吉岡恵美子と伊藤による共同キュレーション。本学情報館の収蔵作品と展覧会のテーマに合わせてゲストアーティスト5名を招いた。昨年度より、学長指定研究費を得て本展に向けた調査を進め、なかでも収蔵作品の富山妙子の『『20世紀へのレクイエム・ハルビン駅』から

シリーズの作品の修復とスライド作品のデジタル化については、企画協力者、修復家、映像制作会社、富山氏のご遺族も含めて多くの関係者の協力を得て実現し、展覧会にて作品をお披露目することができた。長らく公開する機会がなかった本学の貴重な収蔵作品の存在や収蔵作品と絡めたゲストアーティストのメッセージ性の強い作品を展覧会として発信することで、ギャラリーのこけらおとしの企画展として、多くの反響を得た。

後期企画展「Seika Artist File #1『ゆらめくいきものたち』」はTerra-Sの展示空間を活かし、活躍する本学卒業生及び教員のアーティストを紹介するグループ展。ギャラリーの名称に関わる「terra=大地」に息づく動植物(生き物)に着目し、それらをモチーフとする7名のアーティストを紹介した。芸術学部以外にマンガ学部、人文学部の出身者も交えることで、本学ならではの出身作家の多彩な表現を発信し、また、各展示室の建築空間の特徴を活かした展示構成としたことで、Terra-Sの空間の魅力も学内外にアピールできた。会期中に何度も来場する在学学生が多くみられ、学生たちの制作活動の刺激にもなったようである。また、「社会実践力育成プログラム」の科目(ギャラリー業務と展覧会運営の体験)として、受講生が、会期中の受付当番や関連イベントのスタッフなど展覧会の現場を経験した。展覧会と授業が連携した人材育成の場としても有益な機会となった。

②外部機関との連携企画の実施

センター員の飯澤が担当し、松栄堂薫習館1Fで推薦と公募によって選出した本学在学学生による展示を8展行った。

MISSION 3

ギャラリー Terra-Sでの学生の展示・発表の支援

①申請展覧会の運営

「申請展覧会の運営」は、運営スタッフの齋藤とセンター員の伊藤が担当した。ギャラリー Terra-Sでの展示を希望する本学学生、教職員、卒業生を対象とした「申請展」を前期と後期の2回に分けて募集を行い、センター員を審査員とした選考会を実施。評価の高かった15展をギャラリー Terra-Sにて年間をおとして実施した。

教員による申請としては、「ドラフト・ライブラリー in 明窓館」、「小田隆展／小田研究室大学院合同展示」、「死ぬまで絵を描き続けるには2」、「合同陶芸展」、「マンガ — 野良の芸術」、「うつろい」 「光のむこう側で」、「ようこそドゴン」があり、授業や研究活動の成果発表の場として活用いただいた。学生による申請は、「X人X」、「光をくぐり抜けた人」、「参与観察2」、「プレーンマンガ」、「生命の花」など、学部や大学を横断して自主的に集まった意欲的な企画が目立った。

②ホームページの情報更新、③年次報告書の作成

センター員の伊藤と運営スタッフの齋藤が担当。「ホームページの情報更新」は、展覧会やプログラム情報を適宜更新し、情報発信を続けた。また、後期からInstagramのアカウントを開設し、外部のアドバイザーの意見を参考にしながら運営を続けている。フォロワー層の中心が20代であることから学生への周知が有効であると判断し、今後も活用していきたい。「年次報告書の作成」は、2022年

度事業について、実施報告と記録写真を掲載。これまでの報告書と仕様を一新し、より手に取りやすいものとする。発行後は、学内外の関係機関や本センターの活動に関心のある方への配布を予定している。

終わりに

ギャラリー Terra-Sが開館してから丸一年が経ち、運営についてはトライ&エラーの日々であったが、ギャラリーフロール、本館ギャラリー、サテライトスペース Demachiと転々としながら期間限定的なギャラリー運営を続けてきたので、学内に拠点が出来て活動をできることの有り難みを感じている。ただ、これまでとは異なる規模の大きな施設がオープンしたことで、様々な成果とともに課題も見つかっている。

成果としては、本学独自企画の企画展を開催することで、多くの作家・美術関係者から注目され、同時代のアートを発信する京都の新しい拠点として期待の声をいただいた。京都府外からも多くの来場者があり、メディアにも取り上げられるなど多数の反響を得た。また、ギャラリーと隣接するアクティビティコモンズにて、公開講座ガーデンと連携した子供向け・一般向けのワークショップを行い、様々な世代、属性の参加者が集うラーニングプログラムとしてギャラリーの活動の可能性が広がった。

課題としては、一番利用頻度の多い、申請展においては利用者の展示経験不足により、ギャラリー壁面や床面等すでに施設の劣化が見受けられている。長期的な施設運営のためにメンテナンスの計画もスケジュールに組み込む必要がある。また、限られた予算で行う企画展の方向性や規模、本数、収蔵作品の活用についてなども、センターのミッションとは別に、ギャラリーとしての指針が必要であろう。なお、現在ギャラリーは基本的に日曜以外の週6日開場し、週4日勤務の特任講師と業務委託スタッフの2人体制で運営している。経験値のある即戦力人材だからこそ対応できているが、今年度は場当たり的な自転車操業を続けていた。

ギャラリーの運営を本学の課題やミッションも参照しながら、長期的かつ戦略的な視点で考え、プログラムを実施できる人材が現場に不在であり、筆者自身、特任講師の任期を2023年度で終了するため、2024年度のギャラリーのプログラムは白紙となっている。また、自身がこの4年で得た経験値やネットワーク、ノウハウは大学には蓄積されていない。

運営体制が安定すれば、申請展や企画展以外に、学外の機関や各学部・センターと連携した展覧会プログラムや、本学学生・教職員以外にも門戸を広げた企画公募プログラム、在学生や子供を対象とした様々なラーニングプログラム等も実施できるポテンシャルがこのギャラリーにはある。

次年度は、開館2年目に入ったギャラリー Terra-Sの活動がより安定したものになるよう、尽力するとともに、ながらく国内のアートセンターで築いてきた自身の経験値も生かして、京都のアートシーンにおける、ギャラリー Terra-Sの存在感をあげていきたいと考えている。また、5年継続されてきたセンターのこれまでの活動を検証する一年にもなるだろう。

伊藤まゆみ(展示コミュニケーションセンター特任教員)

アートをおく2

ワークショップ 2022年9月29日(木)11:00-17:00
 9月30日(金)11:00-16:00
 ビューイング 2022年10月1日(土)-10月7日(金)
 会場 明窓館内各所(1F|ホワイエ、アクティビティcommons、
 2F|インフォメーションcommons、ホワイエ、4F|テラス)
 ゲスト講師 武田俊彦、中村裕太、齋藤雅宏
 主催 京都精華大学展示コミュニケーションセンター
 企画 宮永亮、豊永政史



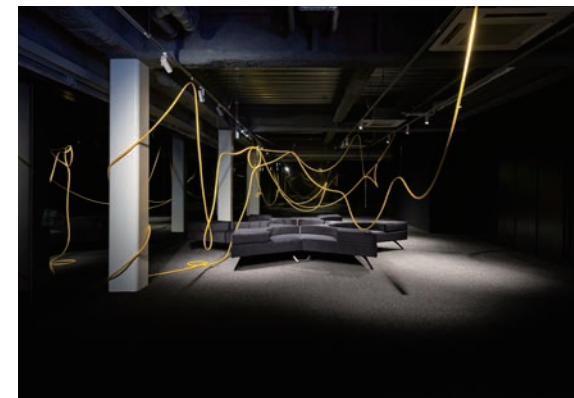
夏休みの終わり、ようやくキャンパスにも人の気配が戻りつつある頃、タケダ工作所代表・本学非常勤講師である武田俊彦氏をメインゲストとし、本学明窓館内の5カ所を利用して「アートをおく2」を開催した。冒頭では2Fインフォメーションcommonsにて、武田氏にご自身の設営/インストール事例の解説をベースとしたレクチャーを行って頂き、貴重な事例紹介に参加者皆が聞き入った。レクチャー終了後、本学の各学部の学生や教員を含めた参加者たちが5つのグループに分けられ、館内各所の5つの空間にてインストール作業を開始した。グループにはそれぞれの担当の空間に対応する個別の「指示書」が手渡され、カラーホース、カットティングシート、木材、土嚢袋、ロープ、鏡、そしてスピーカーなど、「それ自体としては作品ではない」資材を如何にして与えられた空間に「アートとしておく」か、という問いに主体的に対峙し、頭を捻る2日間にわたるワークショップが開始された。



Order 1

空間の特性を読み取り、「拡張と流れ」を提示してください。そして、観者を「包み込む空間」を創造してください。

材料: カラーホース
 *ホースは切ってはいけません。



Title: 抱

Installer: 青木香里奈、石田優子、福岡絹恵、リュウ・イティン

2Fホワイエでは、メディア表現学部、芸術学部、デザイン学部の学生と教員によるグループが、黒い壁面とガラス張りの奥行きのある空間で、カラーホースを使ったインストールを行った。空間を縦横無尽に這い回る黄色いホースに加え、元そこにあったソファと絡めることで、文字通りアートに抱かれるような空間が出現した。時間帯により表情を大きく変える展示は、バス停からガラス越しに作品を見る本学学生や来訪者の目を引いていた。

Order 2

準備された材料を使用し、建築に付随するガラス面に「垂直または水平に連続する光」を構成してください。また色による視覚変化がどのような印象を与えるのかを考察し実践してください。

材料: 透過カットティングシート



Title: frame

Installer: ゲン・ソウケツ、新谷嘉子、鈴木小春、リュウ・カイトウ

2Fインフォメーションcommonsでは、透過カットティングシートという扱いの難しい素材の作業に芸術学部と芸術研究科の学生たちが取り組んだ。2日間という作業時間の中で次第に素材にも慣れ、技術を使いこなしてゆく経過が印象的だった。この空間を特徴づける巨大なガラス板のサイズを引用し、さらにそこに時間の経過の概念も盛り込んだ大規模なインストール作業が、ワークショップ終了の直前まで熱意を持って続けられた。

Order3

与えられた物質と空間、それぞれの印象を基として展開しうる「仮設」を広く思索し、構成、提示してください。尚、構成には「1本の水平と垂直」を含んでください。

材料:木材、砂、ロープ
*木材は切ってはいけません。



Title: 空間の作用

Installer: 岡本裕登、篠崎珠里、ハリヤ、森さくら

1Fホワイエでは、芸術学部、デザイン学部、マンガ学部の学生が、白と黒の壁面とコンクリートの床面で構成された、いわば建築的な空間の中で共働した。参加者たちは積極的な現場での話し合いを重ねながら、和気あいあいと作業に取り組んでいた。長尺の柱材、土嚢袋といった重量・質量のある素材とロープを、物質や重量、重力のバランスや緊張関係の持つビジュアルの強さを盛り込みながら構築した力強い展示となった。

Order4

任意の場所で採集した2つの音声を、部屋の中に配置した2台のスピーカーからループ再生することで、部屋の中に「新しい場所」を構築してください。収録する音声は単一の音だけが入っている1〜2分程度にしてください。

材料:音、スピーカー、アンプ



Title: 音をみる

Installer: 神田凜、松本玲果、山本陽菜

1Fアクティビティコモンズでは、国際文化学部と芸術学部の学生たちが、他の空間と違い外部から遮断される特殊な空間の中で、さらに2つのスピーカーと2つの音声のみで展示を構成するという難易度の高い作業に取り組んだ。学内で何度も納得のゆくまで音声の収録を繰り返し、最適な素材を収集する粘り強さが見られた。空間の特性を活かして、ほぼ完全に暗転した空間の中で音声のみを際立たせるという、野心的なアプローチが見られた。

Order5

与えられた素材を、置く、敷く、重ねることで大きく広く「幾何学的な空」を展開してください。

材料:鏡



Title: 欠陥

Installer: 伊藤華、田口祥太郎、安井雪乃

4Fテラスでは、大量の不揃いなサイズの鏡を使って、芸術学部とデザイン学部の学生による試行錯誤が続けられた。今回唯一の野外展示ということもあり、刻一刻と表情を変化させる「空」をいかに展示に取り込むか。途中で作業空間を訪れるたびに鏡の配置が変化し、参加者たちの苦労が伺えたが、最終的にはテラス空間の半分だけをインストールに利用するという方法によって、空間の広さと物量のバランスを大胆に解決していた。



2日間のワークショップの進行中には、本学教員の中村裕太氏や、本学ギャラリー Terra-S の展示コーディネーターである齋藤雅宏氏もゲスト講師として会場を巡り、武田氏やセンター員と共に参加者へのアドバイスを行って頂いた。各空間でのインストール終了後、ゲスト講師とセンター員が用意した作家の作品／展示資料をスライドで見せながら、館内を巡ってレビューを行った。今回の各所での展示がそれらのオマージュになり得るであろう作品／展示を事前に予測し、その資料を提示しながら実際に館内に現出した各種展示との比較、解説を行うことで、参加者への更なるアートへの理解や問題意識の喚起に努めた。2年間継続してきた「アートをおく」シリーズには、作品ではないものを作品のように、参加者たちが主体的にインストールするという作業を通じて、単なる設営技術指導のみではなく、アートそのものの価値を俯瞰的に、時に批評的に捉えられる視座を参加者への提供するという目的もあった。参加者から頂いたアンケートの内容を見ても、その目的は達成されているように思われる。センターとしては、今後も本学における更なる深いアートへの問いの場を提供してゆきたい。

宮永亮 (芸術学部教員)

アートをやる2

日時 2022年10月7日(金)
 時間 座談会17:30-19:00
 JAPABRAS4+によるライブ演奏19:00-19:30
 会場 明窓館2Fエントランスホール
 (インフォメーションcommons)
 座談会登壇者 小原直樹、平井誠、中島勇、谷垣安子、Bene
 コメンテーター 長谷川新
 音楽ライブ出演 JAPABRAS4+(齊藤聖治、Bene、日永田信一、
 高山豊希、谷垣安子、Kajico、町田燎平)
 主催 京都精華大学展示コミュニケーションセンター
 企画 緒方しらべ、飯澤ちあき



開始前の夕刻、参加者からの相談を掲げたパネル、丸椅子、登壇者の作品やバンドメンバーの楽器が並べられた会場のフロアは、「アートをおく2」に参加した学生たちが制作した窓ガラスのカラーフレーム(「frame」本報告書9頁)を抜けて届くオレンジの光に照らされていた。

「アートをやる2」は、2022年10月7日、前週の「アートをおく2」の関連イベントとして開催された。いわゆるメインストリーム、あるいは芸術界隈の中心にあるアートがあるとすれば、「アートをおく2」も「アートをやる2」も、アートというものを、あえてやや外れた角度から捉え、中心に対して周縁からアートへアプローチするという試みである。

ポスターに記載された登壇者の肩書や職種に戸惑った学生は少なかつただろう。「アルバイト」「契約社員」「ごみ収集業」といった言葉は、成功という希望をもって制作や表現活動を続けたり、就職活動をしたりしている人にとってはピンとこないかもしれない。登壇者やバンドメンバーは、国内の著名なアーティストや国際的な活躍とは離れたところで活動し、生きている。

成功とは何なのか。アートをやるとはということなのか。表現活動や自分がやりたいこと、情熱を

注げることをつづけながら生きていくとはどういうことなのか。それはお金持ちになつたり有名になつたりすることでもあるし、それだけでもない。会場に集まった参加者それぞれに多様な価値観や捉え方があるだろう。参加者がこれから生きていくにあたっていくつもの選択肢があること、それは自分自身で選択可能であることを伝えるために、展示コミュニケーションセンター員は「アートをやる2」を企画した。また、そうした複数の選択肢を提供し合い、尊重し合える環境を、セイカの学生も教職員も、京都市のコミュニティで暮らす様々な人びとも分け隔てなく一緒につくっていくよう、小原直樹氏、平井誠氏、中島勇氏、谷垣安子氏、Bene氏、JAPABRAS4+と長谷川新氏に集まっていた。



陽が落ちたころ、パネルに掲げられた学生から



の相談や質問に対して登壇者が順次発言し、座談会は進められた。参加者37名は、国際文化学部/人文学部、メディア表現学部/ポピュラーカルチャー学部、芸術学部、デザイン学部の学生や卒業生、教職員である。長谷川氏はコメントを加え、マイクを回しながら登壇者と会場の参加者を繋いだ。事前に寄せられた「アートをやる」ことについての8件の相談は、「制作と社会生活は両立できるのか」「本当にやりたいことが何かわからない」「就活を控える不安に思う」「学生のころに影響を受けた作品は?」「制作、生活、制作のための調査のバランスのとり方を知りたい」「身体的な共鳴と共に音楽や映像を展示するための工夫は?」「アートをやることをどう捉えている?」「4年生になった今、何がやりたいのかわからなくなり、制作活動に行き詰っている」「色々なことに関心がある。どれかに絞るべきが、同時にいくつかやってみるのがよいのか? 次のことに切り替えるタイミングやコツはあるのか?」「自分が真面目すぎてうまくいかないとき、どうしたらいいだろうか?」など様々であり、切実だった。いずれに対しても、登壇者たちは20代のころから現在までをふりかえりながら、学生と近い距離で、同じ目線で語りかけようとした。

谷垣安子氏は、嵯峨美術短期大学でイラストレーションを学んだが、「アーティスト」を本業にはせず、訪問看護ステーションで事務職員として勤務している。谷垣氏は、「大学の4年間だけが全てじゃない。自分も焦った時期があったのでその気持ちはわかるが、卒業後に出会う人やもののごともこれからたくさん待っている」と伝えた。「毎日おいしくご飯を食べて、とりあえず生活することがいちばん」という谷垣氏は、制作によって経済的な不安を抱えることをストレスに感じるならば、まずはその不安を解消できるような仕事に就くなど、自分のなかで優先順位をつけることが大事だとも伝えた。

美大には通わず独学で写真を学んだ中島勇氏は、ごみ収集業の契約社員として勤務し、週末はイベントの写真撮影などフォトグラファーとして仕事をしている。「やりたいことを一つに絞る必要はない。同時に進行していく仕事もあったり、一つの仕事が二つに展開したりすることもある」と中島氏。美容師の仕事をしながらフォトグラファーとしても仕事をしたり、イベントでDJをしながら人と繋がることでフォトグラファーの仕事がきたりと、自身の経験をふりかえって話した。中島氏は今、「お金を稼ぐことが8割、制作活動は2割」という自分で緩や

かに決めた「ゆっくりとしたペース」で暮らしている。

小原直樹氏も独学で絵画を学んだ。関西のお祭りやイベント、音楽ライブを中心にライブペインティングや絵画・壁画の制作を行い、平日の多くはごみ収集業のアルバイトをしている。「アルバイトが終わってから自宅で作品を制作しているし、友達のバンドのライブに行ったり飲みに行ったりして遊んでもいるし、悩んでもいるし…」「行き詰ったら、あまり気にせずぼーっとすればいいのでは。悩みを忘れてみる。僕は自然が好きだから、自然のなかでぼーっとしたりすると、生活と作品制作と日々の葛藤やそれと向き合う方法についても伝えた。

平井誠氏は清掃車を運転し、ときに中島氏や小原氏を助手席に乗せ、朝7時半から夕方4時半まで京都市内のごみを集めてまわる。京都大学の吉田寮での16年間の生活、山岳部での登山、バンド活動および音楽イベント主催、大学院での研究を経て現在はごみ収集会社に就職している。アーティストやミュージシャンという肩書はもっていないが、夕方の終業後、傍にギターがあればメロディーを奏で、友人が展示をすれば駆けて足で見て行く。週末や連休は趣味のサイクリングや国内外で旅行を楽しむ。吉田寮時代に染みついたという開かれた空間をつくっていくこと、イベントなどを通じて外の人たちと積極的に関わることは、今でも、音楽・アートのイベントや飲食店などを通じて色々な人と関わっていることに繋がっている。そんな平井氏はお金を効率的に稼げる方法を見つけ、その他にやりたいこと(制作など)があってもいいのではないかと助言する。



他方で、「僕は正社員だけど、今の時代、正社員だからって確実に安心だとは言えない。今まで生きて

きて思うのは、大事なものは、安定した仕事に就くことよりも友達との繋がりがじゃないかと。そのとき、(アート業界や自分の専門性に限定せず)できるだけ色々な属性の人たちと関わることが大事」とも伝えた。

Bene氏は飲食店のシェフであり、スポーツインストラクターであり、音楽バンドのヴォーカリストでもある。「肩書にとらわれずに好きなことをつけてきたBene氏は、「色々やりたいことがあるならば、まず、それぞれにぐっと入り込む時期が必要」「自分の世界を生活の中につくることが大事」だと助言すると同時に、「社会に出たら自分の力で生活することがどうしても必要になってくる」と伝えた。自分の力で生活するとは、必ずしも自分の作品を売って生計を立てたり、自分ひとりで現金収入を得たりということではない。誰かにプロデュースしてもらったり、経済的な支援を受けたり、農村部で自給自足の生活をしたり、起業してみたり、なんでもいい。そうした複数の選択肢から選ぶ生活の基盤の上に制作があるのではないかと考えている。

インディペンデントキュレーターの長谷川新氏は、数多くの多様なアーティストと仕事をしてきたなかで、またひとつ異なる視点からのコメントをした。



「なかには、制作をしないと生きていけない人もいます。そういう人たちにとって、制作は生活を越えたところにある。つまり、アートをやって食べていけるかどうかという問いがそもそも存在しない。そういう次元でアートをやっている人たちもいる」と。

高い天井から差し込むライトはやや弱く、会場はオレンジよりも青みを増した薄暗さだったが、登壇者と参加者の穏やかなキャッチボールはつづいた。

19時をまわり、JAPABRAS4+のライブ演奏が始

まった。Bene氏は2歳の娘を抱っこ紐で抱え、つづけてきた好きなことの一つである音楽を、仲間たちと一緒に奏でた。「ミュージシャン」という肩書は持たないが、バックボカールとして参加している谷垣氏は、座談会で「小説の制作と生活の両立をどう考えればいだろうか」と質問した学生に、こう答えていた。「今日ここにいるみんな(登壇者)は、もちろん悩みもあるが、すごく楽しんでアートをやっている。お金になる・ならないも大事だし、不安もあると思うが、とにかく楽しんでやっている」——JAPABRAS4+の演奏はそれを体現しているように見えた。

その後、展示コミュニケーションセンターには28人から参加者アンケートの回答を得ることができた。「電子サイネージのLEDライトが眩しく会場に居づらかった」「事前に受け付けた質問や相談だけでなく、当日の質問や相談の時間ももっとあればよかった」など、センターとして今後改善すべき意見を得られた。「自分と同じような悩みの相談があり、それについて登壇者それぞれから実体験を交えて話を聞いてよかった」「なるべく楽しみながら自分でもうにかやっていくしかないという気持ちになった」「いわゆるアートと大きな関わりをもったり制作したりはしていないが、生き方を考えるという意味で

は参考になった」という感想も寄せられた。

「アートをやる2」開催の2週間後、Bene氏がシェフを務める左京区の飲食店 Tovira に、5名の登壇者とJAPABRAS4+のメンバーが集まった。「自分たちにとっては珍しい機会だったので楽しめた」「もっと時間があれば会場の学生たちともっと交流できたと思う」「時間が足りずに伝えたいことを伝えきれなかった」「行き詰ったら休んでもいいよと言えるまでに至った葛藤をもっと話すべきだった」「明窓館のあのスペースで演奏できてよかった」「楽しかった!」などの感想が飛び交った。

「アートをやる2」は、2021年度の「アートをやる」の第二弾であった。今年の経験を活かし、2023年度の「アートをやる3」に向けてこのプロジェクトを展開する予定である。企画する側の私たちセンター員も、行き詰ったら休むこともできるんだと、学生たちに、教職員である自分たち自身に言えるよう、「楽しむ」ことを忘れずに企画をつづけていきたい。

緒方しらべ (国際化学部教員)

*本企画は、京都精華大学個人研究奨励費「アーティストとして生きるために:京都市内の飲食店を中心としたコミュニティと作品制作を続ける人びとの繋がりに関する人類学的研究」(研究代表者:緒方しらべ)の助成を受けています。



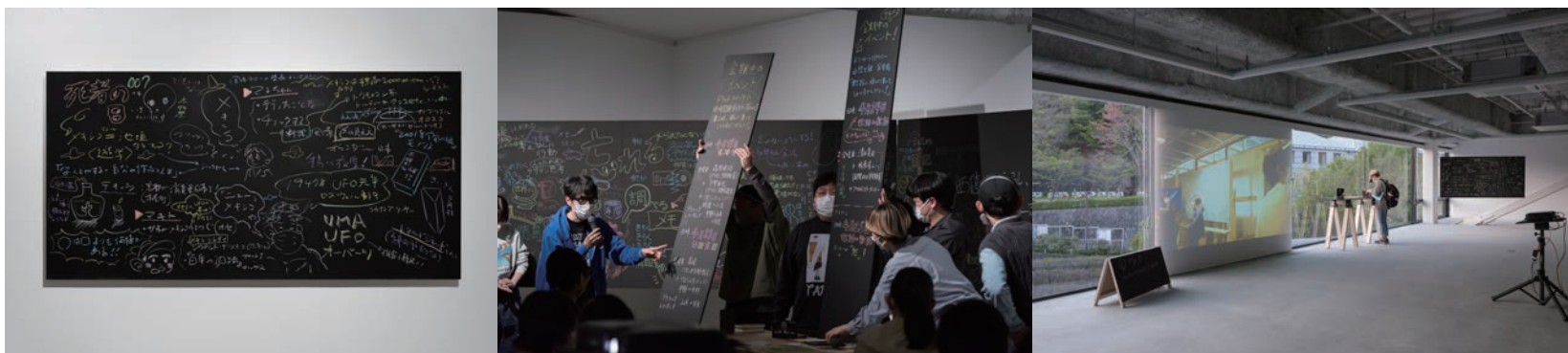
ドラフト・ライブラリー in 明窓館 書を拾い、喋るでしかッ!

会期 2022年4月19日(火)~4月27日(水)
時間 11:00~18:00
会場 京都精華大学ギャラリー Terra-S
主催 ドラフト・ライブラリー実行委員会
プロジェクトメンバー 中村裕太、中野裕介、伊藤まゆみ、小出麻代、佐藤光儀、新道牧人、武田俊彦、久門剛史、宮永亮、山本理恵子、米原有二、劉子杰
開場日数 9日
入場者数 458人

2021年の春頃から、芸術学部・体幹教育の教員や学生を中心に構想し、継続的に試みてきた、芸術表現をとめない「外」へと解き放つためのプラットフォーム「ドラフト・ライブラリー」。「食堂」「メキシコ」「色の見え方」「病的な白」など独自のキーワードのもと、登壇者がお薦めの本を紹介し、参加者との対話を行いながら、グラフィックレコーダーがその内容を黒板に記録した。本展では、全7回分の黒板と記録映像、紹介された本を展示。会期中には、関連イベントとして、ギャラリー内や明窓館内にてゲストを招いて「ドラフト・ライブラリー」を開催した。展示やイベントをとおして「ドラフト・ライブラリー」を創りだすプロセスを鑑賞者に体験していただいた。



グラフィックデザイン
伊藤裕



小田隆展

人体×動物

小田研究室大学院合同展示

けものぼこ

会期 2022年5月10日(火)～5月18日(水)
 時間 11:00～18:00
 会場 京都精華大学ギャラリー Terra-S
 主催 小田研究室
 出展作家 小田隆、三浦麻乃、リュウ・ヨウ、府高航平、
 バク・ジウ、チョウ・コウトウ
 開場日数 8日
 入場者数 1,023人

マンガ学部教員の小田隆の個展と小田研究室の大学院生5名によるグループ展をギャラリーを二分して同時開催した。個展「人体×動物」では小田がこれまで取り組んできたテーマ「観察／絵画制作」について近作を中心に展観した。人間を含めた生き物が等身大に描かれたキャンバス群はギャラリー空間を絵画との対話の空間に変容させた。また、小田のライフワークである大量のクロッキーも公開。グループ展「けものぼこ」では、実在の動植物から恐竜、想像上の生き物をユーモラスに描いた作品が展示された。会期中、学生によるライブ・ドローイングが定期的に行われ、会場を彩った。

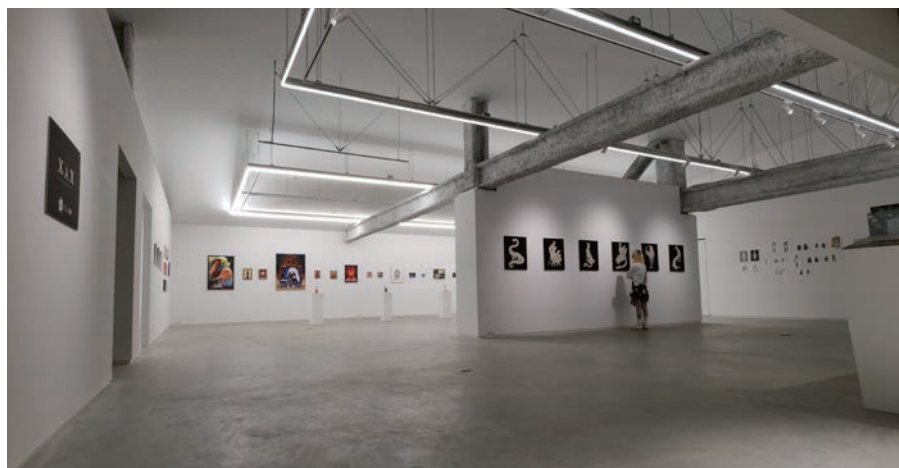


X人X

会期 2022年5月24日(火)~6月5日(日)
時間 11:00~18:00
会場 京都精華大学ギャラリーTerra-S
主催 ゴ・カエツ
出展作家 チョウ・ジンユ、チョウ・カイナン、ゴ・カエツ、
ジョ、れお、黒洞、二三、生徒Z、kaiki
開場日数 12日
入場者数 705人



マンガ学部とマンガ研究科の在学生9名からなるグループ展。展覧会タイトルの「X人X」とは、人間という概念がいつも動物と区別されていることに問題意識を感じて名付けられた。本展は、人間ではない生き物「人外」をテーマに、絵画、立体、マンガ、イラストレーションなど様々な方法で人間以外の生き物を描写し、幻想的で生き生きとした世界観を映し出した。擬人化された動物や半人半獣がモチーフとして登場し、生き物や自然の現象を人工素材を用いて表現したインスタレーションなど、多様な「人外」達が鑑賞者の目を楽しませた。



京都精華大学ギャラリーリニューアル記念展

越境—収蔵作品とゲストアーティストがひらく視座

会期 2022年6月17日(金)–7月23日(土)
 時間 11:00–18:00
 会場 京都精華大学ギャラリー Terra-S
 主催 京都精華大学
 出展作家 シュウソウ・アツチ・ガリバー、
 いちむらみさこ、今井憲一、
 ローリー・トビー・エディソン、塩田千春、
 下道基行、嶋田美子、谷澤紗和子、
 津村侑希、富山妙子、潘逸舟
 開場日数 32日
 入場者数 1,462人
 助成 芸術文化振興基金、
 公益財団法人朝日新聞文化財団、
 京都精華大学学長指定課題研究費
 協力 株式会社ポイジャー
 企画 吉岡恵美子(京都精華大学芸術学部教授)、
 伊藤まゆみ(京都精華大学展示コミュニケーション
 センター特任講師、ギャラリーTerra-Sキュレーター)
 企画協力 レベッカ・ジェニソン(京都精華大学名誉教授)、
 萩原弘子(大阪府立大学名誉教授)

グラフィックデザイン
 塩谷啓悟



ギャラリーのリニューアルオープン後、初の企画展として、大学の収蔵作品とゲストアーティストによる展覧会を開催。既存のジャンルや制度、価値観における「越境」をテーマとし、「ジェンダー/歴史」「身体/アイデンティティ」「土地/記憶」などのキーワードを参照しながら、11名のアーティストの作品を展覧した。展示会場を各キーワードで緩やかに区切り、収蔵作品とゲストアーティストの作品を配置しながら、キーワードと作品、作品と作品、作品と鑑賞者との対話が生まれるような展示構成となった。収蔵作品をアーティストの作品と共に現代的な切り口で紹介し、両者を組み合わせることによって新しい関係性や価値観を提示することができた。

関連イベント

オープニング・イベント

日時 | 6月17日(金)17:00-
 会場 | 明窓館3Fギャラリー Terra-Sほか

下道基行「14歳と世界と境」朗読会

日時 | 6月18日(土)14:00-15:00
 会場 | 明窓館3Fギャラリー Terra-Sほか

潘逸舟「表現と居場所」アセンブリーアワー講演会

日時 | 6月23日(木)16:20-17:50
 ※学外の方はオンライン聴講のみ

谷澤紗和子「ことばの切り紙」ワークショップ

日時 | 7月9日(土)14:00-16:30
 会場 | 明窓館3Fギャラリー Terra-Sほか

キュレーターによるギャラリートーク

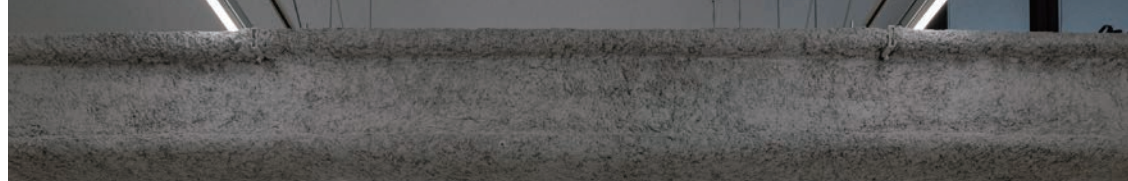
日時 | 7月2日(土)14:00-15:00(吉岡)
 7月18日(月・祝)14:00-15:00(伊藤)
 会場 | 明窓館3Fギャラリー Terra-S

「作家たちの越境～富山妙子、ローリー・トビー・エディソン、嶋田美子～」シンポジウム
 日時 | 7月23日(土)15:00-17:00
 ゲスト | 嶋田美子(本展出品作家)、レベッカ・ジェニソン(京都精華大学名誉教授)、萩原弘子(大阪府立大学名誉教授)
 モデレーター | 吉岡恵美子(本展担当キュレーター)
 会場 | 黎明館 B1F・L-002教室

いちむらみさこ アーティストトーク※
 「隔絶、それでも生の際で—ジェントリフィケーションとアート」
 日時 | 7月15日(金)16:20-17:50
 会場 | 黎明館 B1F・L-002教室

いちむらみさこ「わたしのだれかのこと」ワークショップ※
 日時 | 7月16日(土)13:00-16:00
 会場 | 明窓館3Fギャラリー Terra-Sほか

※共同開講 マイノリティの権利、特に SOGI をはじめとしたく性の多様性)に関する知識と、それらを踏まえた表現倫理のリテラシーを備えたアートマネジメント人材育成プログラム「#わたしが好きになる人は/#The people I love are」
 令和4年度 文化庁 大学における文化芸術推進事業





死ぬまで絵を描き続けるには2

会期 2022年8月2日(火)~8月9日(火)
時間 11:00~18:00
会場 京都精華大学ギャラリー Terra-S A区画
主催 TADAゼミ
出展作家 4年生 | mya、Caramel、モリ、猜透うつつ、
黒部 POT、白川、河豚刺身、吉田次朗
3年生 | あわぢ、まさか、えぬお、西江真人、
山崎和美、やけどするぜ
ゲスト | 南岡明花音、カノハアネ、蓮本、
カロイカロ、タダユキヒロ
開場日数 8日
入場者数 604人

マンガ学部キャラクターデザインコース、タダユキヒロゼミの3年生と4年生を中心とした授業の成果発表展。ゲストに卒業生やタダ自身による作品展示も行われた。各作品には、ゼミに所属する期間に考えた自身が考える「作品を長く作り続けるにはどうすればよいか?」について考えを述べたテキストが添えられた。本展に訪れた、作品を作ることに疲れた学生や、気持ちが離れかけている社会人に対して、「私もまた絵を描きたいな」と、そっとな背中を押してあげられるような、そんな作品づくりのきっかけや閃きを与える展示を目指した。



光をくぐり抜けた人

会期 2022年8月2日(火)–8月9日(火)
時間 11:00–18:00
会場 京都精華大学ギャラリー Terra-S B区画
主催 WEI Wei
出展作家 魏威(ウェイ・ウェイ)、黄志道(コウ・シショウ)
開場日数 8日
入場者数 604人



大学院芸術研究科版画領域に在籍する魏と東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻に在籍する黄による光をテーマにした展示。魏は半透明の光沢フィルムを取り付けた枠を空間に配置し、来場者が光の中を潜り抜けるようなインスタレーション作品を展示した。黄は光にまつわる私的な記憶や情景を、写真と映像、立体、テキストを組み合わせたインスタレーションで表現した。



合同陶芸展

会期 2022年8月26日(金)～8月31日(水)
 時間 11:00～18:00
 会場 京都精華大学ギャラリー Terra-Sほか
 主催 合同陶芸展実行委員会
 参加大学 京都精華大学
 京都市立芸術大学
 嵯峨美術大学
 京都芸術大学
 京都美術工芸大学
 開場日数 5日
 入場者数 298人

京都で陶芸を学ぶ学生の交流と発表の機会として2010年より毎年開催され、今年で12回目を迎えた5大学の合同展。2018年度、2019年度は京都精華大学ギャラリーフロールで開催。伝統工芸としての陶芸から現代美術としての陶芸まで、幅広い表現の可能性を探ること目指した。器から立体造形まで多様な陶芸作品が、ギャラリー空間と明窓館2階インフォメーション・commonsに展開した。参加大学の教員による合同合評も実施。オープニングイベントとして、ギャラリー前のアクティビティcommonsにカフェ&ショップスペースを設置。珈琲店「おぼろ」が outlets、器の購入者にコーヒーをふるまった。



参与観察2

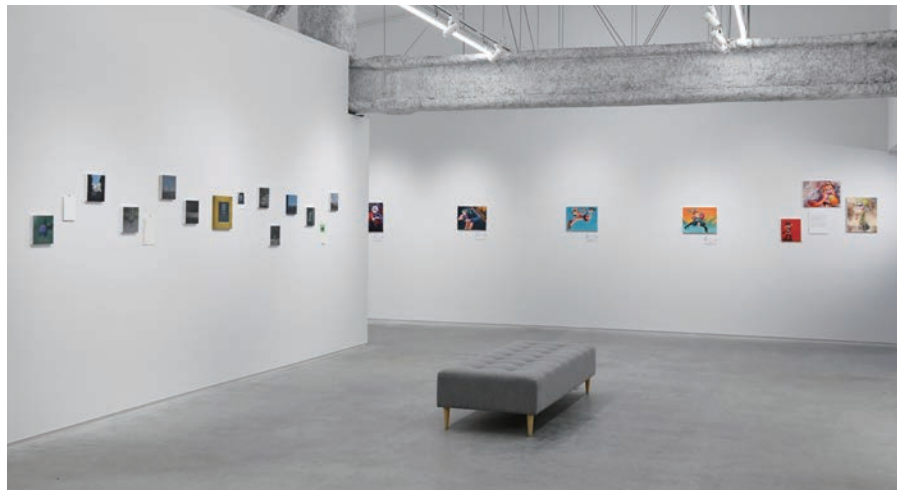
会期 2022年9月6日(火)–9月14日(水)
時間 11:00–18:00
会場 京都精華大学ギャラリー Terra-S
主催 カクラブ
出展作家 おおしまたくろう、まきのみつる、内原和之、
放蕩息子、白戸辰弥、塚本悠斗、望月亮
開場日数 8日
入場者数 127人

2020年10月に本学本館ギャラリーで開催した「参与観察」展の続編企画。「参与観察」とは研究対象である社会や集団に調査者自身が加わり、生活をともにしながら観察を行い一次資料を収集すること。本展では、作家が制作を行う際に自身の生活空間から題材を収集するさまを参与観察に見立てた。2020年の「参与観察」展では、コロナによって急激に変容した生活空間を俯瞰するべく参与観察を行ったが、2回目となる本展では、自分達自身に焦点を当て、作家の内的な興味・関心の移り変わりを参与観察して展示に反映させることを目指した。ギャラリー空間には絵画、立体、映像、音響など様々なアプローチによる表現が立ち現れた。



関連イベント

おおしまたくろうによる滑琴の実演&滑走体験
まきのみつるによるモール制作実演&制作体験
日時 | 9月12日(月)11:00–18:00
会場 | ギャラリー Terra-S



ブレンマンガ 言葉のない物語

会期 2022年9月21日(水)–9月29日(木)
時間 11:00–18:00
会場 京都精華大学ギャラリー Terra-S
主催 Liisa
出展作家 Liisa
開場日数 7日
入場者数 270人



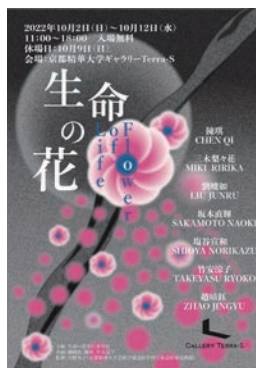
マンガ学部ストーリーマンガコースの4年生、Liisaの個展。インクとスクリーントーンを使用したセリフのないコマ漫画を「ブレンマンガ」として展示した。本展では、コロナ禍の緊急事態宣言で街が閑散としていた2020年頃以降に制作した作品を展示。当時、静かな時間が流れていた街は、平行世界(パラレルワールド)のように嘘と現実が相互に侵犯を繰り返しているようであり、作家はその不安定な世界線を捉えようと制作した。鑑賞者は、何かが起こる寸前や直後、一瞬の出来事など、作品世界が表現する物語を楽しんだ。



生命の花—Flower of Life

会期 2022年10月2日(日)~10月12日(水)
 時間 11:00~18:00
 会場 京都精華大学ギャラリー Terra-S
 主催 生命の花実行委員会
 出展作家 チン・キ、三木梨々花、リュウ・シュンジョ、
 坂本直輝、塩谷宣和、竹安涼子、チョウ・ジンユ
 開場日数 10日
 入場者数 481人

芸術学部造形学科立体造形専攻と洋画専攻の3・4年生を中心としたグループ展。コロナ禍により大きく変化した生活や日常をとおしてその意味を考えるようになった「生命」。本展は「生命の花」をテーマに、厳しい現実を経験しながらも暗闇の中にある希望の光を表現した。立体、洋画、映像、写真、インスタレーションなど、「生命の花」を共通項にさまざまな作品によって空間が構成された。展覧会が「生命」に対する繊細な気づきを共有し、新たな思索、希望を喚起する場となることを目指した。



マンガクラス創設50周年記念展 マンガ—野良の芸術

会期 2022年10月18日(火)–10月25日(火)
時間 11:00–18:00
会場 京都精華大学ギャラリー Terra-S
主催 京都精華大学マンガ学部カートゥーンコース
開場日数 7日
入場者数 476人

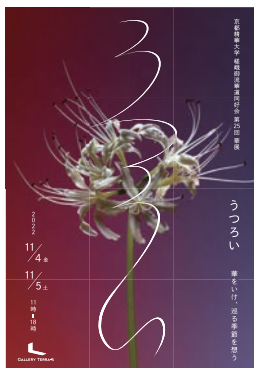
本学にマンガクラスが設立された1973年から50年の節目の年を記念して、マンガ学部カートゥーンコースが主催となり、教育と実践の観点からこの半世紀の軌跡を振り返る展覧会を開催した。マンガが市民権を得た1970年代から、多様なメディアが複雑に織り成す今日まで、設立当時の資料や、OB・現役教員/学生の作品展示を通して、これまでの成果を振り返るとともに、これからのマンガ教育について展望した。



京都精華大学 嵯峨御流華道同好会第25回華展 うつろい

会期 2022年11月4日(金)–11月5日(土)
時間 11:00–18:00
会場 京都精華大学ギャラリー Terra-S
主催 京都精華大学嵯峨御流華道同好会
後援 はな古伝
開場日数 2日
入場者数 194人

嵯峨御流華道同好会「華展」の第25回目の展覧会。「いけばな」は常にうつろう自然の素材を使う芸術であり、その場所、その時間でしか味わうことができないものである。展示している間にも、蕾が開花し、葉の色は刻々と変化する。ギャラリー空間の特徴である一面に見える外の景色を生かし、作品と景色が一体となるような展示を目指した。季節や時間で変化する景色と作品のコラボレーションも見どころであった。



Seika Artist File #1

ゆらめくいきものたち

会期 2022年11月18日(金)–12月24日(土)
 時間 11:00–18:00
 会場 京都精華大学ギャラリーTerra-S
 主催 京都精華大学
 出展作家 イケガミヨリユキ、今村源、衣川泰典、
 野田ジャスミン、船井美佐、
 ミロコマチコ、安喜万佐子
 開場日数 33日
 入場者数 1,539人
 企画 伊藤まゆみ(京都精華大学展示コミュニケーション
 センター特任講師、ギャラリーTerra-Sキュレーター)
 展示 齋藤雅宏(京都精華大学ギャラリーTerra-S展示コー
 コーディネーター)

ギャラリーTerra-Sの展示空間を生かし、活躍する本
 学卒業生及び教員のアーティストを紹介するグループ
 展「Seika Artist File」展の第一弾。「terra=大地」に
 息づく動植物(生き物)に着目し、それらをモチーフとす
 る7名のアーティストを紹介した。芸術学部、マンガ学部、
 人文学部ゆかりの作家が参加し、イラスト、絵画、映像、
 彫刻、陶芸、版画、インスタレーションなど、多彩なメ
 ディアの作品が並んだ。会期中は学内外から多数の来
 場者があり、なかでも様々な学部の在学生が来場し、リ
 ビーターも多かった。展覧会初日には出展作家のアー
 ティスト・トークに続き、ミロコマチコと音楽家の曾我大
 穂によるライブペインティングを開催し、沢山の観客で
 盛況となった。



グラフィックデザイン
 漆原悠一(tento)

関連イベント

アーティスト・トーク

日時 | 11月18日(金)16:30–17:30
 会場 | 明窓館3FギャラリーTerra-S

ミロコマチコ×曾我大穂 ライブペインティング

日時 | 11月18日(金)18:00–19:30
 会場 | 明窓館1Fグロウバルラウンジ
 出演 | ミロコマチコ×曾我大穂
 (音楽家、舞台芸術グループ『仕立て屋のサーカス』演出家)

公開講座ガーデン陶芸教室 ワークショップ

野田ジャスミンワークショップ
 「ひみつのねんど〜土練りワークショップ〜」
 講師 | 野田ジャスミン
 日時 | 11月26日(土)13:30–16:00
 会場 | 明窓館3FギャラリーTerra-Sほか

こどもガーデン絵画教室

船井美佐ワークショップ「いきものの絵を描こう!」
 講師 | 船井美佐
 日時 | 12月10日(土)13:00–16:00
 会場 | 明窓館3FギャラリーTerra-Sほか

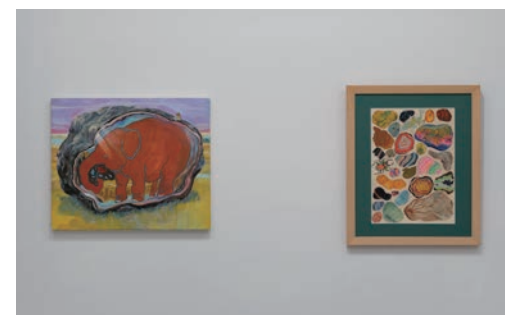
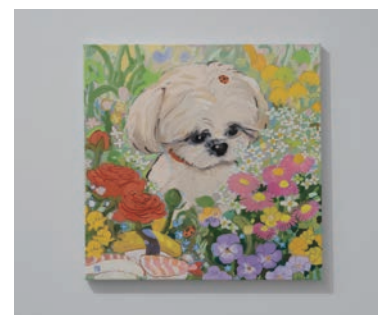
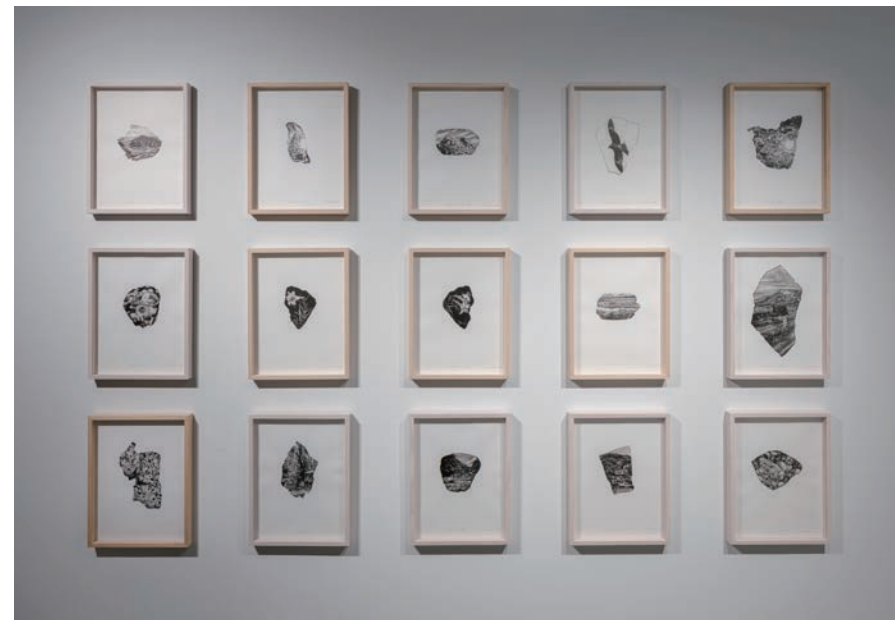
衣川泰典 ワークショップ「マープル・リトグラフ」

講師 | 衣川泰典
 日時 | 12月17日(土)13:00–17:30
 会場 | 明窓館3FギャラリーTerra-Sほか

キュレーターによるギャラリートーク

日時 | 11月20日(日)、12月3日(土)
 12月24日(土)14:00–14:40
 会場 | 明窓館3FギャラリーTerra-S

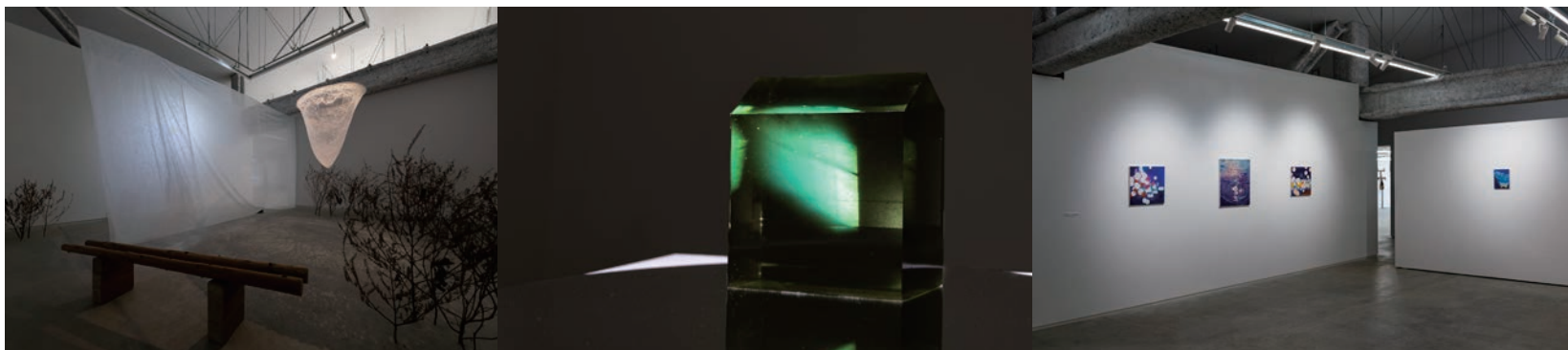




光のむこう側で

会期 2023年1月6日(金)–1月18日(水)
時間 11:00–18:00
会場 京都精華大学ギャラリー Terra-S A区画
主催 京都精華大学現代アートプロジェクト実行委員会
出展作家 國枝愛子、葛本康彰、栗棟美里、小出麻代
企画 秋山紗良、安達衣梨、枝廣花音、金ヶ江ひとみ、
殊井愛佑、タン・レンリュウ、チン・ジュントウ、
泊博子、舛田糸子、道上優香、山本万柚子、
吉岡幸真希、吉野綾
監修 吉岡恵美子(京都精華大学芸術学部教員)
協賛 桜ノ宮活版倉庫、株式会社和光
開場日数 10日
入場者数 500人

芸術学部教員の吉岡恵美子が担当する授業「表現研究3、4」「現代アートプロジェクト演習4」の受講生たちが企画から運営までを行った展覧会。出展作家の4人は活躍する本学卒業生より展覧会のテーマを元に出展。彼・彼女らの作品は光そのものというより、光のむこう側や光の周囲に着目し、通過する光が映し出す一瞬の姿や影が持つ深みまでを見る者に感じさせる。何気ない現象や関係性を救い上げる視点と手法が共通する作品がギャラリー空間で静かに響き合った。



ようこそドゴン

会期 2023年1月6日(金)～1月18日(水)
 時間 11:00～18:00
 会場 京都精華大学ギャラリー Terra-S B区画
 主催 CAACCS(アフリカ・アジア現代文化研究センター)
 開催日数 10日
 入場者数 500人

アフリカ・アジア現代文化研究センターが独自に発展したドゴンの文化を紹介する展覧会。ドゴンの村々はマリ共和国のバンディアガラ断崖を中心とした台地と平原にある。絶壁と岩山により王国や帝国の支配を逃れてきたこの地は神々が宿るといわれ、壮大な創世神話が伝えられている。本展では、儀礼に使う仮面や神具、ドゴンの村を再現したジオラマや、「青い狐」の占いのミニチュア、御神体の「トロ」などを展示。村に伝わる仮面ダンスの貴重な映像も上映し、ドゴンの子どもたちが作ったブリキのおもちゃや粘土の置物、仮面の絵も紹介した。展示資料はDOGON 西アフリカ・クラブ代表の浜裕夫氏より本学に寄贈いただいた。



プロジェクト企画演習 2022 成果展

会期 2023年1月24日(火)–1月28日(土)
 時間 11:00–18:00
 会場 京都精華大学ギャラリーTerra-S
 主催 京都精華大学
 出展作家 芸術研究科 | ギ・シンエツ、久保遥、倉橋咲妃、
 コウ・シンケン、セイ・テン、チョウ・ゴモク、
 藤村明日香、前川琴瑚、吉田麻央、リュウ・カイン
 デザイン研究科 | カ・シイク、セキ・ショハン、
 チン・ショウイ、テイ・ウキン、テイ・シジュン、トウ・ギョク、
 ヨウ・シカン、ウ・キ、キョウ・メイ、コウ・ブントウ、
 セツ・ヨクネイ、ソウ・ユウリン、リ・カシヨウ、リ・セイ
 マンガ研究科 | ケイ・ウヒ、バイ・ゴウ、見沢咲歩、
 リアン・リンシュエン、ジャー・イン、ソウ・ヒンシン、
 チョウ・コウトウ、トウ・トクシン、リュウ・ジュウリン

開場日数 4日(大雪のため1/25臨時休館)
 入場者数 227人

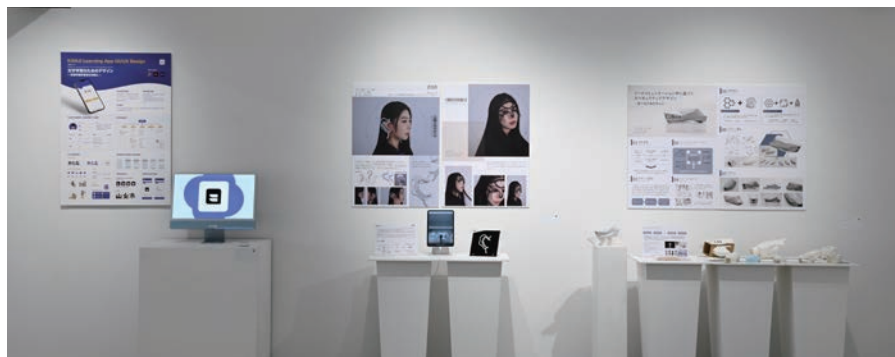
2022年度の「プロジェクト企画演習」を履修した大学院芸術研究科、デザイン研究科、マンガ研究科の1・2年生の有志34名がそれぞれの研究・制作の成果を発表した。授業をとおして、展示レイアウトの検討や広報物の制作など、展示会を開催するために必要な様々な要素を学び、各研究科が協働して展示空間を作り上げた。会期中には関連イベントとして、出品者が観客の前に出品作品について説明する公開プレゼンテーションを研究科ごとに開催。ゲストを招いて作品に関する批評や展示方法についてのアドバイスなど、今後に繋がる貴重な意見をいただいた。



関連イベント

出品者による公開プレゼンテーション
 日時 | 1月27日(金) 10:30–16:00
 10:30–12:00(マンガ研究科)
 13:00–14:30(デザイン研究科)
 14:45–16:00(芸術研究科)

会場 | 京都精華大学ギャラリーTerra-S
 ゲスト | マンガ研究科: ユー・スギョン(京都精華大学マンガ学部特任講師、京都精華大学国際マンガ研究センター所属)
 デザイン研究科: 刀根彰吾、安間仁美(デザイナー/mondo)
 芸術研究科: 山本麻友美(京都市文化政策コーディネーター、京都芸術センターアーツ・アドバイザー)



木野祭2022 作品展示会 サイコウ!展

会期 2023年2月10日(金)–2月11日(土)
時間 10:00–17:00
会場 京都精華大学ギャラリー Terra-S
主催 木野祭2022実行委員会
出展作家 アマビエ部(ヤマト・デヴィッド)、阿毛香絵、
井上拓飛、おいしーやみー(坂齋祿、佐々木健太、
田中大喜)、大島楽翔、久場愛美、小山正悟、知子、
チョン・ユジン、難波佳暖、西池陽麻、ハン・ズイテイ、
ピアノシモ、牧田貴大、森さくら、ヤン・ジェヒョク、
doRiM waVES(松村康矢、秋山紗良)
開場日数 2日
入場者数 592人

「木野祭2022」の作品展示会として、「サイコウ!展」を開催した。昨年は、コロナ禍の影響でオンラインのみの開催だった木野祭だが、今年は大学創立後初の対面とオンラインを併用した形での開催となった。「サイコウ」というテーマには、一つ目には、誰もが「最高」と思える学園祭であること、二つ目には、例年対面で行われていた木野祭を蘇らせる「再興」、三つ目には、一人ひとりの学生が輝く「採光」の学園祭という意味がこめられている。本展では、テーマの「サイコウ」のもと、学部・学科問わず、学生と教職員が制作した作品をギャラリー Terra-Sとオンラインギャラリーで展示した。



京都精華大学展 2023 卒業・修了発表展

会期 2023年2月15日(水)–2月19日(日)
時間 10:00–17:00
会場 京都精華大学ギャラリー Terra-S
主催 京都精華大学
出展作家 芸術研究科
洋画領域 | ジョ・リンヨウ、チョウ・ブンレイ、
チン・シキ、松尾由紀奈
日本画領域 | 西中麗美奈、玉岡莉子
立体造形 | 嶋田賢太
染織 | 池山瑠樹、亀田ひなた、リ・カコウ
版画 | ギ・イ、小島花菜
芸術理論 | 喜多里律
マンガ研究科
実技領域 | 府高航平、三浦麻乃、リ・ゲイカツ

開場日数 5日
入場者数 3,256人

「京都精華大学展2023—卒業・修了発表展—」における大学院芸術研究科13名とマンガ研究科3名の展示。芸術研究科の洋画、日本画、立体造形、染織、版画、芸術理論の各領域とマンガ研究科の実技領域の修了生が大学院での二年間の制作・研究の成果を発表した。

関連イベント

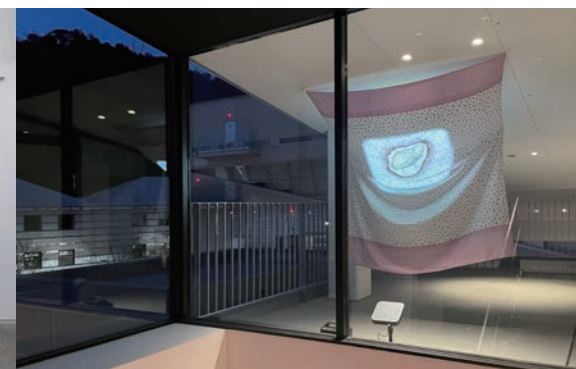
公開作品講評会
日時 | 2月17日(金) 13:00–16:30
会場 | 京都精華大学ギャラリー Terra-Sほか
ゲスト | 渡辺亜由美(滋賀県立美術館学芸員)



〇〇が連続された時

会期 2023年2月28日(火)～3月9日(木)
 時間 11:00～18:00
 会場 京都精華大学ギャラリー Terra-S A区画
 主催 朱家宜
 出展作家 唐田綾子、沈楠、朱家宜、ジダーノワ・アリーナ、
 中村百花、平岡真生、船越董
 開場日数 9日
 入場者数 301人

メディア表現学部助手の朱家宜が企画した展覧会。手描きアニメーションと絵画を「動／静」のように対照的な表現形態として区別するのではなく、どちらも時間軸が内包された表現と捉えた。作家が制作過程や時間表現に込めたコンセプトは身体感覚や環境、社会など幅広く、作品同士がギャラリー空間で響き合っていた。展示室内で映像作品上映プログラムを実施し、出展作家以外に造形学部造形学科映像専攻の五菴クルミ、東京藝術大学大学院映像研究科の李澤昊が参加した。また、朱家宜による場外展示作品の音楽をメディア表現学部助手の旧こいけが手がけた。



兆し

会期 2023年2月28日(火)~3月9日(木)
時間 11:00~18:00
会場 京都精華大学ギャラリー Terra-S B区画
主催 芸術学部造形学科立体造形3回生
出展作家 岡澤武、シュー・ヤティン、ジョン・ジョンヒ、武田虹羽、
ダヴィド・ドボシュ、磨田花朗、西口瞬、萩野明日香、
古田瑠名、山下怜美、和田萌杏
開場日数 9日
入場者数 301人



芸術学部造形学科立体造形3回生と交換留学生によるグループ展。物事が生まれる気配を作品から感じ取ってもらえるような展覧会にしたいという企画意図のもと、平面から立体、インスタレーションまで幅広い作品が展示され、ギャラリー窓際のフロアを埋め尽くした。本展企画者の磨田花朗と交換留学生のダヴィド・ドボシュによる共作も展示。大学で学び過ごした時間や交流が、新たな兆しとなることを期待させる展覧会となった。

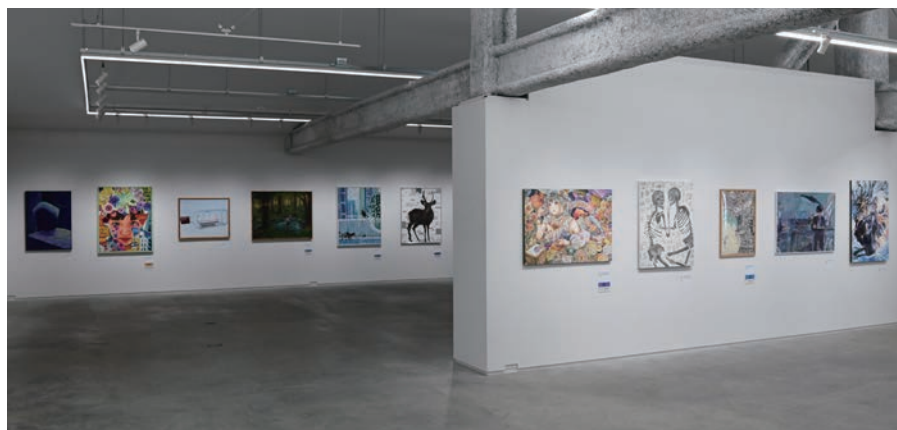


高校生のための第4回創作作品コンペティション 「SEIKA AWARD 2023」入選作品展

会期 2023年3月16日(木)～3月22日(水)
時間 10:00～17:00(最終日は15:00まで)
会場 京都精華大学ギャラリー Terra-S
主催 京都精華大学
開場日数 7日
入場者数 293人



高校生の自由な創作活動の応援と、新しい才能の発見を目的としたコンペティション。第4回目となる今回のテーマは「世界」。全国から960点の応募があり150点が入選した。本展では美術・工芸、デザイン、マンガ、メディア、文章、授業作品の6部門の受賞・入選作品を展示。入選作品のなかから43点をグランプリほか入賞作品として選出し、会期中に授賞式を実施した。全国各地から集まった高校生の力作を多くの来場者にお楽しみいただいた。





京都精華大学 展示コミュニケーションセンター 2022年度活動報告書

発行日 2023年3月31日

編集 伊藤まゆみ、齋藤雅宏(京都精華大学展示コミュニケーションセンター)

デザイン 花戸麻衣

撮影 花戸麻衣(p.8-11,46-47)、池田英史(p.12-15)

高野友実(p.16-17,42-45)、表恒匡(p.23-25)

発行 京都精華大学

〒606-8588京都市左京区岩倉木野町137

www.kyoto-seika.ac.jp/



GALLERY TERRA-S

京都精華大学 ギャラリーTerra-S